

33期 有光 哲彦



1998年にボート部生活から解放され、勉学に励むため大学院(精密工学専攻)への進学を選んだ。ソニー(株)では先進的な研究職に抜擢され、米国の勤務の後、2011年に再進学(博士課程後期課程)が実り、苦節三年の末、博士(工)(専門:音響工学)を修めた。学術やスポーツに対する授賞式で、体連ボート部より「学生の半数近くが後楽園で学び、

文武両道を進めたい。」相談があり、恩返しもあり応えることにした。専任教員に就き、ボート部員とのコミュニケーションを図るため、ボート競技に関する研究テーマを取り入れた。理工学的な論理的思考が学生の競技力やその後のキャリアにつながることを考え、深夜の理工学部では円陣になって研究資料を基に考え方を説いた。年々、学業、就職、競技力の向上成果も見られ、皆の活躍が嬉しい限りである。さて、ボートの研究については、ボート及びオールを疲労などの快適性に着目して桑野造船(株)、藤倉ゴム工業(株)と協力して用具開発を進めている。その取り組みは、新聞社、テレビ局で注目を浴び、中央大学の強さは、理工学部を含めた競技力向上に対する強い探求心による総合力である。今後の競技者として研究成果の活躍を願っている。



新聞掲載記事

34期 清水 千比呂



熱心に情報収集をし、メニューを考えてくれたり、少ない部費をやりくりして、新しいオールを買ったり、いつも明るいスパーウーマン、一期後輩のカメちゃん。4年生のインカレまで出漕し、引退した翌年にカメちゃんの年賀状がアパートに届きました。「最初はいろいろ大変でしたが、去年はちひろさんという結果が出て嬉しかったです。」そんな内容でした。新人戦の結果の方がすごいのに。：。当時の自分はばやいていました。カメちゃんとダブルに乗り始めた頃は、乗る艇がなかったり、インカレに木製の借艇にマコンで出漕したり、本当に大変でした(笑)それでも、メダルが欲しくて、戸田での市民権も手に入れたくて必死でした。新人戦で結果を出したシーズンにも相模湖の補助に来てくれたり、最後の理工戦でダブル乗ってくれたり、本当にありがとうございました！今までちゃんと覚えてなかった気がしますが、今は子供がおチビで無理だけど、また一緒にダブル乗ってね！記念誌の投稿依頼をいただき、たくさんの思い出がよぎりました。中でも、最後に思い出して涙が出そうになったこのエピソードを選ばせていただきました。

34期 小島 基和



私は95年に入部、上級生の人数が少なかったこともあり2年時には主務、翌年はなんと主将をさせてもらいました。入部した当時は先輩方だけではエイトが人数不足で、コックスをやる人もおらず、立候補してインカレクルーに乗せてもらいました。経験も無い状態でエイトに乗れたことは先輩方も大変な英断だったと今この文章を作りながら思い返しております。またトップコックスのフォアを現役当時に購入して頂いたのですが、取まりきるギリギリの身長(178cm、戸田で一番背の高いコックス)で苦労したのを覚えております。見える景色がまるで違うので乗艇の度にワクワクし、顔の真横が水面は思い過ぎですがそのような感覚でした。私が主将をさせて頂いた当時は、存続の危機を毎年のように経験しておりました。諸先輩方にはご心配を掛けましたが、55周年を迎えて活躍している姿を拝見すると、後輩の方々の頑張りに大変感謝しております。私は卒業をしてから今まで転職を繰り返しながら福岡市内で働いております。なかなか納会や新歓などには参加することができず、こうして当時の事を思い返していると先輩方や後輩たちに会いたくなりました。

40期 小林 修一



現在私は滋賀県大津市の琵琶湖近くに住んでおります。琵琶湖には関西の大学の艇庫があり、練習をしている学生の風景が身近にあります。通勤時などに見かけると昔を懐かしく感じます。現役時代は部員が少なく、常に2〜3名で活動していました。よくダブルスカルの同期の大野さんと組み、私がストロークを漕いでいました。現役最後のレースはダブルスカルの出場した相模湖レガッタで、1000mを2人息の合った良いレースを行えたことを今でも覚えています。4月に行う新生勧誘活動では毎年一喜一憂、どうすれば魅力が伝えられるかを模索していました。ある年の入学式では目立とうとしてダンボールでシングルスカルの模型を作成して、ブリスに飾っていたのは今となっては笑い話で、理工ボート部を次の代へと渡すために一生懸命でした。華々しいレース結果を残すことはできませんでしたが、理工部屋での合宿、大学の部室で昼寝など、大学生活の中で理工ボート部は居場所の1つで大切な時間であったと思います。この時間を一緒に過ごした先輩、仲間感謝しております。

42期 山下 英明



「戸田公園が帰り道だから」、「先輩が優しくそうだから」という理由で入部した私ですが、途中で部員が極端に少なくなるという事態に直面しました。練習や大会出場も満足にできない時期が長く、部の存続危機となり、主将として頭を悩ませたのを覚えています。そんな中、何とか繋げることが出来たのは、監督・先輩の支え、部員が少ない中でも入部してくれた後輩、そして新歓や納会でのOBの方々からの激励があったからだと思います。OBからの「山下、頑張れよ」という言葉や、楽しそうに現役の頃の話をされる姿に、理工ボート部の歴史の重さを感じ何とか踏み張ることが出来ました。そして、振り返るとボート部で逆境を経験したことが、社会人になってから活きているのを感じます。

創部55周年おめでとうございます。第47期の櫻井と申します。私が入部したときは上級生3人、同期5人と、人数はソコソコおりましたが、練習艇が少なく乗艇練習が困難な状況でした。もともと所有していたエイトやフォアは破損しており、ろくに修理予算もないため、中大艇庫の建替えと共に払い下げしてしまった悲しい思い出があります。おかげで湯河原のマラソン大会に参加するなど、ボート競技以外の活動も行わざるを得ませんでした。しかし大学院生になったときは、起死回生で桑原君・仲田君が理工ボート部をリードし、驚きと安心が交錯したのを覚えております。

47期 櫻井 一貴



私は現在、ベトナムのゼンハイという地域で発電所の基礎地盤作りに携わっております。日本とは物価も暮らしぶりも違うところで生活をするという自分の価値観が広がり、日本という国を改めて知る良い機会となっておりです。皆さんの中でも卒業後は海外で活躍する方も出てくると思われませんが、日本だけで通じるような常識にとらわれずに大きな視野を持って世界で活躍することを期待しております。ちなみに東南アジアではボートやカヤックを漕がされる方が多く、皆さんの今の経験が意外な形で役立つと思いますよ(笑)

49期 福田 匠太



私は中央大学杉並高校ボート部の出身で、3年間ボートに打ち込んでいました。インターハイ出場を目標としていましたが、最後はわずかに届かず。大学ではボート部に入るつもりは無く、他の運動部を探していましたが、運動施設の少ない理工キャンパスでは自分に合う部活やサークルを見つけれずじまいでした。大学2年生の冬、中杉ボート顧問の山田先生から連絡があり、中島監督と当時唯一の部員だった小林さんと会うことになりました。理工ボート部が廃部寸前であることを知り、「好きに漕いでいい」と言われ入部を決めました。

53期 多田 開史



53期COXの多田開史と申します。理工ボート部創部55周年誠にありがとうございます。自分が現役で入部した当初は部員が10人にも満たず毎回5、6人で練習するなど、こじんまりとした活動をしておりました。しかし、そのおかげで漕手とCOXを兼任したり、部の仕事も目に付くものは全てやらせていただきました。最後は所属組織も兼任しチャンのCOXもさせていただくなど本当に充実したボート生活でした。現在は広告会社のマーケティング部に所属しています。業務内容としては自社の経営戦略をどう実行するかを考える事から、イベントの雑用まで幅広く多岐に渡りやらせていただいております。戦略部分ではCOX時代に考えた経験が活かしています。現役時代になんども幅広くやらせてもらっていたのでそのような点もいまにとても活かしているように感じます。(やつてないことは本質的にはあんまり変わってないかもしれません笑)改めて52年間自分達の代に繋いでくださった先輩方と繋いでくれた同期と後輩の皆さんには感謝を申し上げると共に、これからも潰れそうでもない文房具屋のように細々とでもいいので、理工ボート部らしい細長い発展を心よりお祈りいたします。

53期 間 仲 貴大



現コーチの桑原さん(当時は現役でした)にボート部と関係ないサークルの歓迎会で誘われたことがきっかけで理工ボート部に入部しました。入部した時の時は、ただ漕ぐだけでそこそこ面白かった記憶があります。しかし、初めての大会(東日本新人)の練習が始まると、練習がとてもしんどいと感じることが出来ませんでした。そのため、大会が終わったら辞めようと考えていました。そしていざ、レースがスタートし1000m漕ぎきった後、とても気持ちよくなって帰ったので辞めることをやめました。そうして4年間理工ボート部の一員として活動して、私の今があります。辛いことや大変なこと、しんどいことなど沢山ありましたが、理工ボート部としての活動が楽しかったから続けてこれました。

私は現在、社会人1年目としてIT企業で働いています。IT系の学科を卒業したわけではなく、毎日力的にしんどいです。しかし、現役時代と同じように、辛い時期を乗り越えたら仕事が楽しくなると信じています。現役の皆さんは楽しんで大学生活を送ってください。OB・OGの皆さんはエイトを漕いで楽しみませんか？



テムズ川でローイング

本場イギリスのローイングクラブに所属して感じたこと

17期 下遠野 享

17期として理工ポート部を卒業して30年以上漕いでいませんでしたが、理工系レガッタに出場するOBエイトで幸運にも声を掛けてもらい、そのレースでは久しぶりに身体が芯まで堪える快感(苦痛?)が蘇りました。現役時代に誇らしい実績を残した選手ではありませんでしたが、ボートを漕いだ感触に特別な感慨がありました。4年近く前に57歳で前職を早期退職する前後でリタイア後に何か熱中できることを探していた時期でした。身体に染込んで懐かしいボートを数十年前に再開できたことの喜びを感じていました。その早期退職から少しして、縁があつてイギリスの小さなITベンチャー企業で働く機会を得ました。この10月で丸3年が過ぎました。会社はロンドンから西へ電車で30分ほどのテムズ川沿いの町にありReadingと綴りレディングと呼びます。単身での生活で積極的に余暇を過ごすと考え、こちらに来て初めてコースに出たゴルフクラブではなく、地元でローイングクラブのマスターズチームにも在籍しています。偶然近所にあつただけですが、創立170年を超える歴史あるクラブでした。会員はJuniorからMastersまで300名を超えますが、これで標準的なクラブサイズです。渡英直前にボートを再開していたことがクラブ加入の意欲に繋がったことは真に幸運だったと今に思っています。

イギリスのボート競技者はクラブクルーか大学クルーかで二分されます。我がクラブには様々な年齢で(40、50歳代の中年男女でも!)初めてオー

私の現役時代の理工ポート部は廃部寸前から復活しかけていた時です。入部当時は5、6人だった活動人数が、引退時には20人を超える人数になった過渡期でした。それでも、OB会に購入していただいた新艇を(後輩ながらも)使用でき、先輩には伴チャや乗艇で丁寧に指導していただき、活動しやすい環境だったと感じています。

レースは、女子部員の先輩がいなかったため、ほとんどを同期の関さんとダブルスカルで出場しました。医科歯科大に競り負けた東日本新人選手権レースが遅すぎる三大戦の招待レース、ラスト500mで刺されたお花見R、スパートを入れるタイムシタを間違えた東日本選手権:「現役時代の思い出」というと、できなかつたこと、悔しかつたレースばかりが思い浮かんでしまいますが、同期と共にレースや運営を経験して、充実した濃く大学生活を送ることができたと感じています。私が感じたことや失敗談も、役に立つうちにぜひ後輩に共有していきたいです。

卒業後は中央大学の大学院に進学予定です。大学院での生活がどのようなものになるかはわかりませんが、卒業後もOGとして、OB・OGエイトなどの活動に積極的に参加していきたいと考えております。

前述のイギリススポーツ協会のホームページは各クラブ主催の大会の参加登録手続きを一括してサポートしてくれまして。レースに出漕する選手は例外なく同協会へ安く年会費を払って協会メンバーとして登録しなければならず、組織としての仕組みも成熟しています。主催者であるクラブはレースエントリー費用をクラブ運営に役立てます。我がクラブも年二回比較的大きな大会を主催します。年間レース開催数が多いこともあって一つ一つの大会に良い意味で強い拘りがなく淡白とも言えるのですが、毎月のようにレースで顔を合わせるため近所のクラブ同士は互いにライバル関係に自然となつていきます。日本で現役時に経験した年一回のような「ラスト感」が無くレースがとても身近に感じるような気がします。

Coxの掛け声が随分違います。最後に余談ですが、ボートと同様にゴルフにも現在熱を上げており、とても廉価なブレイフイーのため、週末両日(ボートを漕いだ後)、そして日の長い夏場は時には平日夕方から、と思う存分プレーができています。しかしながら、当たり前ですが必ずしもプレー回数に単純比例してスキル向上するわけでもなく、なかなか上つた日々を送っております。レッスンプロに習ったことも無く、唯一の情報源は自分で選択したYouTubeの情報のみという状況でどこまでいけるのか多少不安ですが、楽しめていることだけは確かです。

53期 重綱 隼人



私は中杉時代から7年間ボートに携わり、理工ポート部もその時から知っていました。51期の桑原さん、テル先輩は、実はお二方の試乗会で一緒に乗ったりと、それなりに関わりがありました。しかし当時の理工に対する印象は「廃れたチーム」だったと記憶しています。

そんな私が理工に入りたと思うたのは進路も決まった高3の冬。フォアの練習に参加したとき、桑原さんの「昔のように部員を増やして大会もいっぱい出て、もう一度理工ポート部を盛り上げたいんだ!」という熱意に私も共感したからです。そうして集まった53期はまさに理工の過渡期にいた代でした。理工ポート部単独の長沼合宿、2000m出場、新歓PV制作、数年ぶりの女子部員:初めてな事が多く、1番の思い出は?と聞かれても挙げられないくらい濃い4年間を過ごすことができました。

4年間で部員は2倍に増え、賞もとれるようになってきました。その中で私が2年間キャプテンを務められたのは私の力ではなく、OB・OGさんのサポート・同期や後輩たちが頼りになったからに他なりません。改めて振り返って、非常に楽しい4年間でした。

私は、平成31年度の国土交通省技術系総合職に内定をいただきました(日30・10月現在)理工ポート部史上初?の快挙なのですかね。ありがたいことです。

54期 萩野 皓介



私は、平成31年度の国土交通省技術系総合職に内定をいただきました(日30・10月現在)理工ポート部史上初?の快挙なのですかね。ありがたいことです。

官庁訪問という複数回面接を行う中で、理工ポート部での活動はともも助けになりました。特に、自己PRを行う際に「大学からの新しい挑戦」「副部長としての活躍(特に何もしていないけど...)」等々、何かと話せる内容は多かつたです。

また、某53期(1期先輩)の方に付けてもらった「親方」というあだ名は、理工ポート部の活動で得た最も有益なものかもしれません。今ではポート部員のみならず、OB・OGの方々、同科の学生、国交省の採用担当の方や内定予定者までに広がりました。

先日、内藤現会長にお会いした際、内藤会長と3期の長谷川さんのお二方も学生時代に国家試験に合格していたと伺いました。しかし、お二方も面接を受けに行かず、教授にこつぱど怒られたとか何とか。

そんな漢気あふれる土木学科の先輩方が創部をした理工ポート部で、都市環境学科となつた今、その意志をついで活動できたことを誇りに思います。

54期 荒井 丈満



55年間の先輩方とともに記念誌に寄稿させていただけることを大変光栄に思います。

2年ほど前からこの記念誌の作成に向けて、同期の萩野君とともに様々な活動をしてきました。OB・OGの皆様にも現役当時のお話を聞きたいにインタビューをさせてください。この記念誌の寄稿文を書いていただき、皆さんのご協力をいただきました。ありがとうございます。この場を借りてお礼申し上げます。

55年間の歴史の中で見ると私は大した功績は残せませんでした。ボート競技に出会えたことはこれからは一生の誇りにして行きたいと思っています。

理工ポート部OB・OG会では、月に1回戸田ボートコースに集まって、理工系レガッタや各大会に向けて練習する「OB・OGエイト」を行なっています。これからは理工ポート部OBとして、時間が合う時にはOB・OGエイトにも積極的に参加したいと考えております。引退後も乗艇ができる機会です。皆様も是非いかがですか!

これから60年、70年、100年と理工ポート部が続き繁栄していくことを願っています。

54期 瀧川 綾乃



私の現役時代の理工ポート部は廃部寸前から復活しかけていた時です。入部当時は5、6人だった活動人数が、引退時には20人を超える人数になった過渡期でした。それでも、OB会に購入していただいた新艇を(後輩ながらも)使用でき、先輩には伴チャや乗艇で丁寧に指導していただき、活動しやすい環境だったと感じています。

レースは、女子部員の先輩がいなかったため、ほとんどを同期の関さんとダブルスカルで出場しました。医科歯科大に競り負けた東日本新人選手権レースが遅すぎる三大戦の招待レース、ラスト500mで刺されたお花見R、スパートを入れるタイムシタを間違えた東日本選手権:「現役時代の思い出」というと、できなかつたこと、悔しかつたレースばかりが思い浮かんでしまいますが、同期と共にレースや運営を経験して、充実した濃く大学生活を送ることができたと感じています。私が感じたことや失敗談も、役に立つうちにぜひ後輩に共有していきたいです。

卒業後は中央大学の大学院に進学予定です。大学院での生活がどのようなものになるかはわかりませんが、卒業後もOGとして、OB・OGエイトなどの活動に積極的に参加していきたいと考えております。

54期 関 日菜々



私が「理工ポート部」を知った時は、部員に女子はおらず、募集している雰囲気はありませんでした。私はそんな部の雰囲気はお構いなしに、入部を決めていました。さぞかし先輩方を困らせたことでしょう。

しかしながら、男子しかいない中で辞めずに続けられた(辞めさせられなかつた)のは、同じタイミングで入部を決めた瀧川と、偶然同じ学科だった萩野と荒井の存在が大きかったと思います。同期3人がいたから、夏の暑さでもめげずに、冬の寒さでも耐え忍んで練習をすることができたのだと思います。(ありがとうございます)

私の代が理工ポート部に入部したことで、ボートに興味を持ってくれた女の子が入部しやすくなりました。その後の理工ポート部を少しでも変革することができているのだとしたら大変光栄です。この流れがこれからも絶えずに続くことを願っています。

先輩方が作り上げてくださった「理工ポート部」の未永い発展を切望するとともに、私もこれからはOB・OGさんの活動に参加させていただき、少しでも現役の活動のサポートができればいいなと思っています。よろしくお願ひします。